

◆◆◆ インフルエンザ対策

11月の末から流行が始まるインフルエンザは12月から2月にかけて最も多くなりますが、今年は例年より早く流行しているようで、11月10日（日）までに休校や学級閉鎖となった学校が全国で78施設に上り、この時期では過去10年で最多になりました（厚生労働省まとめ）。

インフルエンザは年間を通じてみられる病気ですが、寒くて乾燥する季節に発生が多くなるのが特徴です。症状の特徴としては、高熱と筋肉の痛みなどの全身症状です。

インフルエンザがなぜ冬に流行するかというと、実はインフルエンザウイルスは高温多湿の環境では長時間生存できないのです。鳥や豚、人間の体内で増殖するウイルスですが、感染形態は空気感染になります。いったん、空気中に放出されたインフルエンザウイルスが最も長時間生存できる条件はまず、空気が乾燥していること、次いで気温が低いことです。これは、一般の細菌などと大きく異なっています。特に湿度の影響が大きく、50%以下になると急激に増加します。国立感染症研究所や民間の気象会社がインフルエンザの予防情報を出していますが、その根拠は主に空気の乾燥と患者数の関係であり、その際の乾燥度合いは相対湿度ではなく空気中の水蒸気量を使っています。

インフルエンザウイルスは風邪を引いている人の鼻や喉からくしゃみや喉の時に外部に飛散し、空気中に広がっていきます。このときに空気が乾燥していると、ウイルスは長時間生存し、これを吸い込んだ人が感染する空気感染によって拡大していきます。最近の研究ではウイルスのついたもの、例えば電車のつり革やドアのノブなどに触った手で、鼻をこするなどの接触感染の危険も指摘されています。インフルエンザは郊外より都市のほうが感染しやすい病気です。東京や大阪などの大都市では、乾燥した空気と大気汚染で喉や鼻の粘膜を痛めやすいこと、人間が多いために感染する機会が多いことなどが原因です。もちろん集団で生活する学校、幼稚園、保育園、老人ホームなどでは都市に限らず一度感染者が出ると短時間に感染が拡大します。

インフルエンザは有効な治療法が少なく、予防が一番の対策です。新型インフルエンザはともかく、通常のインフルエンザの予防はその流行季節の前にワクチンを注射することです。ワクチンを注射しても100%効くわけではありませんが、たとえ感染しても症状はかなり軽くなります。次は、インフルエンザの嫌う環境を作ることです。インフルエンザウイルスは低温低湿の環境を好みますから、その逆の環境、つまり、暖かく、多少湿度の高い状態にすればよいのです。気温では最低気温が8度以下で患者が増加しますから、室内で気温の低い場所を作らないこと、また、湿度では50%以下で増加していますので、加湿器を用いて室内の湿度を上げるようにします。

((財) 気象業務支援センター振興部専任主任技師 村山貢司)